

ABARTH, a Powerful Spirit within a Compact Body.

ABARTH
500アバルト500
かわいいボディに高出力1.4ℓ
ターボを積んだ小さなスポーツカー。ABARTH
595C
TURISMOアバルト595Cツーリズム
より高出力なエンジンに小粋なオープンボディ
+2トーンカラー(オプションカラー)。ABARTH
695
EDIZIONE
MASERATIアバルト695エディツィオーネ マセラティ
スーパーカーブランドのマセラティと
コラボした究極の限定モデル。
2013年発売の限定車で全車完売。ABARTH
595
COMPETIZIONEアバルト595コンペティツィオーネ
排気音を含めて走る楽しさをさらに
追求したトップモデル。ABARTH
PUNTO
SUPERSPORTアバルト プント スーパースポーツ
プントをベースに専用ハイテクエンジン
搭載。伝統のボディカラー。さんしょう
山椒は小粒でもピリリと辛い。いま、日本ではイタリア車のアバルトが絶好調だという。
小さなボディに高出力エンジンを詰めこんで、元気いっぱい走るアバルトの魅力とは？

イタリア車のアバルト(ABARTH)が売れている。昨2013年の日本におけるアバルトの販売実績は、なんと前年度比2倍以上の伸びを記録した。その台数はグローバルで見ると第2位。アバルトにとって、地元イタリアを除く輸出先市場では日本が世界一のマーケットということである。

アバルトとは、レーシングライダー出身のカルロ・アバルトによって、1949年に設立されたチューニングメーカーである。アバルトは早くから、そのベース車両として、小型軽量かつ堅牢な設計のフィアットに注目。街を走る小さなフィアットと同じカタチをしたアバルトのレーシングカーは各地のレースで大活躍した。そして、70年代にフィアット傘下に入って以降のアバルトは、フィアットグループ直系の

モータースポーツ部門として、ラリーやツーリングカーなどの世界選手権、欧州選手権などのビッグタイトルを次々と獲得する。そんな彼らの高い技術力を、ファンや専門家は敬意を表して「アバルトマジック」などと呼んだ。

現在のアバルトは、オシャレでかわいいデザインで女性にも人気の「500」や、スタイルと実用性を両立した「プント」をベースとしている。そんなフィアットの(イタリアの街ではポピュラーな存在の)コンパクトカーに、エンジン高出力化、大径タイヤと引き締めたサスペンション、そして機能的な空力部品……などなど、アバルト伝統の手法で「武装」した小さなスポーツカーである。

アバルトの走りはとにかく元気で活発だ。最新のターボ技術でチューンされたエンジンのサウンドは図太く、その

小さな体に似合わないほどの迫力である。ハンドリングは俊敏で、カーブを泳ぐように嬉々として駆け抜ける。そして、その能力を存分に引き出せるサーキットでは、大排気量のスーパーカーをも軽々と追い回すほどの速さを見せるアバルトの姿は、痛快というほかない。アバルトの本質はその黎明期からなんら変わっていないのだ。

じつは、日本でのアバルト人気は今にはじまったことではない。アバルトの名を冠したイタリアのコンパクトカーは70年代から日本に輸入されており、知る人ぞ知る存在として、つねに確固たる支持を得てきた。日本は昔から世界有数のアバルト市場なのだ。日本のエンスージアスト

は、こういう「ヒネリのきいた」楽しいクルマに対する目利きや理解力では、世界的にちょっと知られている。

山椒は小粒でもピリリと辛い。これは言うまでもなく「体は小さくとも才能や力量が優れていて、侮れないこと」のたとえである。そんな日本古来の決まり文句が、アバルトというイタリア車に見事なほどピッタリと当てはまるのが面白い。そもそも、小兵が大きな敵を倒す……といった逆転劇を、われわれ日本人はとくに好む傾向にある。キュートなデザインと熱い走りを両立したアバルトはまさにイタリア文化そのものだが、その本質はどこか日本人のDNAと共通するものがある。



小さなボディに熱い走りのこだわりを込めるのがアバルトの伝統。

1.4ℓターボや切れ味のいい変速機などの走りのメカニズムだけでなく、内外装にも隅々までこだわりを満ちたアバルト。ステアリングホイールやシートも高品質でレーシーなデザインのレザー仕様。写真のTURISMOはセレブ感すら漂う2トーンカラーが魅力。